

2017年3月10日

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

1998年長野パラリンピック アイススレッジスピードレースで3冠 引退後はパラリンピック教育の促進に従事

マセソン 美季氏

スペシャルインタビュー 公開

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する、笹川スポーツ財団（所在地：東京都港区 理事長：小野清子 以下：SSF）では、スポーツの価値や意義を検証し、あるべきスポーツの未来について考える機会として、日本のスポーツの歴史を築かれてきた方々へのインタビュー記事「スポーツ歴史の検証」（<http://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx>）を連載しています。

次世代のスポーツ振興の架け橋をテーマに今回ご登場いただくのは、1998年長野パラリンピックのアイススレッジスピードレースで金3、銀1の計4個のメダルを獲得して日本のパラリンピックの礎を築き、引退後も指導者として従事してきたマセソン美季（松江美季）さんです。

カナダと日本を行き来しながら、パラリンピック教育に奔走しているマセソンさんに、2020年東京パラリンピックのあるべき姿や、日本と海外との障害者スポーツ事情の違いについてうかがいました。

笹川スポーツ財団 スペシャルサイト『スポーツ歴史の検証』 第57回 支える「みんな」が満足できるパラリンピックに マセソン 美季氏

スポーツ歴史の検証 で検索ください！

【URL】 <http://www.ssf.or.jp/ssf/tabid/813/pdid/243/Default.aspx>

【主な内容】 アクシデントがきっかけとなったアイススレッジスピードレース/パラリンピック直前、突然の「開花」/夢の中ですりかわった銀メダリストから金メダリストへ/イリノイで感じた日本との大きな違い/「Jキャンプ」は質のいい選手育成の「種まきの場」 など



マセソン 美季（ませそん みき）氏

大学卒業後、「障がい者スポーツの先進地」である米イリノイ大学に留学し、競技力向上を目指す傍ら、指導者としての専門知識を学ぶ。引退後はその経験を活かし、住まいのあるカナダと日本を行き来しながら、「パラリンピック教育」に奔走している。

インタビューアー 山本 浩（やまもと ひろし）氏

1953年生まれ。スポーツ評論家。NHK在職中はエグゼクティブアナウンサー、解説委員（スポーツ・体育分野専門）として活動。現在は法政大学スポーツ健康学部教授を務める。

<スポーツ歴史の検証>概要

【企画制作】 公益財団法人笹川スポーツ財団

【後援】 スポーツ庁、東京都、公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会ほか

【特別協力】 株式会社アシックス

この件に関するお問合せ先
笹川スポーツ財団 経営企画グループ：古坂（ふるさか）
TEL：03-5545-3301 info@ssf.or.jp